

チャペル ブックレット No.19 大学創立50周年記念号

# 命 の こ と ば

水谷 誠



  
Culture & Human Resources  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY  
名古屋学院大学

 SINCE 1964  
LOOK  
FORWARD  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY 未来をともに進もう。

名古屋学院大学 宗教部

チャペル ブックレット No.19 大学創立50周年記念号

# 命 の こ と ば

水谷 誠



SINCE 1964  
50 LOOK FORWARD  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY 未来をともに進もう。

名古屋学院大学 宗教部

## 命のことば

水谷 誠



みづたに まこと  
**水谷 誠**

日学校法人同志社理事長

- 1951年 京都生まれ
- 1974年 同志社大卒
- 1977年 同志社大学大学院神学研究科博士課程（前期課程）修了
- 1994年 同志社大学神学部助教授
- 2000年 同志社大学神学部教授
- 2009年 神学部長・神学研究科長、同志社理事に就任
- 2013年 同志社理事長就任

研究分野は宗教学（プロテスタント・キリスト教組織神学）、思想史（近代ドイツ・キリスト教思想史・キリスト教の日本における受容をめぐる諸問題）、哲学（シュライアマー研究）

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

ヨハネによる福音書1章1～5節

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

ヨハネによる福音書1章14節

### 共通すること

本日は名古屋学院大学創立50周年記念礼拝にお招きをいただきまして、大変ありがたく、光栄に存じます。この礼拝に先立ってキャンパスをご案内いただき、名古屋学院大学になにか馴染みとといいますか、親しさを感じた次第です。また先ほどごいっしょに斉唱いたしました讃美歌「昔主イエスの」は同志社におきましても、入学式、卒業式などの式典の時に必ず歌っております。この由木康先生の作詞なされた讃美歌を同志社でもよく歌っているのでございます。また、この学校の創立当初よりの建学の精神である「敬神愛人」という言葉も、もちろんこれは聖書の中にある「神を愛しなさい、隣人を愛しなさい」という生き方の根本となるものの見方を表現しているもので、キリスト教の中ではよく知れ渡った印象深いそして馴染み深い言葉であることはその通りなのでありますけれども、私にとっても懐かしい言葉であります。

同志社という学校ができましたのが1875年でありましたが、その学校を設立した校祖新島襄はちょうど名古屋学院が創設されたところに仙台に一つの学校を建てたのであります。東華学校といいまして、仙台の地元の政界あるいは財界の人たちが協力して、新島襄が校長となって始めた学校でした。残念なことに、東華学校は創設数年後に新島襄が亡くなりまして、そのころの社会状況として国粹主義が高まっていた時期とも重なり、5年半ほどで廃校となりました。ただその基となる精神は現在にも引き継がれておりまして、県立の中学校、高等学校に繋がっているのであります。

その東華学校のモットーの一つに「敬天愛人」という言葉がございました。「天」という言葉は福沢諭吉が「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と表現した「天」であります。元の英語“GOD”を日本語に訳した時に彼は「天」という表現をあてたのでありまして、「敬天愛人」も「敬神愛人」も基本的に同じ意味でございます。キリスト教の土台となるものの見方を通して皆様方の名古屋学院大学も私たちの同志社も繋がっている、共通するところがあるのだということを、この礼拝に先立ちまして感じた次第です。

## 教育とは

同志社は新島襄という日本人によって設立されました。名古屋学院は宣教師のクライン先生によって創設されたとうかがっています。130年近く前でしょうか、クライン先生は名古屋でどのようなものの方で、どのような人となりでもって教育事業にあたられたのかということをお招きをいただいて以来色々と思ひめぐらせてまいりました。どのような方であったのか、なかなか想像がつきにくいのでありますが、そのあたりで同志社の宣教師を少し見てみますと、色々な人がおりました。同志社の第一回目の卒業生に小崎弘道という人がおられます。東京の霊南坂教会の牧師となった人です。年老いてから自伝、自らの生涯を振り返った書物を書きました。その中に同志社で勉強していた当時の先生方の様子が記されております。一人は宣教師のドーン先生でありました。純粋で素朴な信仰

の持ち主でありまして、日本に来る前には、南太平洋の小さな島々で宣教活動に従事していたという人です。血気盛んな生徒たちは先生に質問を浴びせかけます。科学的な視点からの質問だと思いますけれども、「世界はいったいつごろどのようにしてできたのか」という質問に対して、ドーン先生は真面目な顔をして旧約聖書に書かれてあります天地創造以来の色々な数字を足しまして、「おおよそ5千何年前である」と伝えたところ、生徒たちは一斉に「いったいなんてことを言うんだ」ということで、先生を笑い飛ばしたという話がでてまいります。

もう一人ラーネッドという宣教師が出てまいります。ラーネッド先生は同志社で人生の大半を過ごし70歳を超えてからようやくアメリカに戻られた方です。ラーネッド先生はアメリカで古典文献学の素養を積んで学者として同志社に赴任いたしました。同志社では多くの科目を教えました。キリスト教に留まらず、経済学であれ語学であれ諸々のものを必要に応じて教えた先生です。ラーネッド先生に対して生徒が鋭い質問をしますと、正直な先生は、“I don't know.”を連発したということがその書物の中に出てまいります。自伝の中には新島襄の話も出てきます。新島先生は46歳で1890年に亡くなりました。若死にであったと言えますが、同志社を創ってから、学校を維持運営していくために東奔西走して寄付金を集めた、そういうことに時間を費やした方でありました。おそらく学校が始まってからはゆっくり書齋に籠って勉強する余裕がなかったのかもしれない。担当した聖書の授業で生徒たちは先生がどのような研究書、注解書を使って授業を準備しているのかということをおおきく確認しておいて、そしてそれ以外の研究書、注解書を使って先生に質問を浴びせ、先生が答えに詰まるとそれを大いに喜んだという記述も出てくるのであります。学校を設立、発展、運営していくなかで、教員たる者本来の授業にとどまらず様々な業務をこなしていかなければならない状況の中で、そのようなエピソードが出てくるのかとも思いますけれども、しかし同時にそのような形で、授業で鋭い質問を浴びせて先生たちを困らせたという生徒たち、これは小崎弘道の自伝にとどまらず当時の記録をみてみますと同様の記述が

ありますが、それにも関わらず、先生たちは素晴らしい人たちであった、人間として信頼をし、そして尊敬をし、生涯の師として仰いだという記述が出てくるのであります。もちろん大学ですから教育にとどまらず研究活動、社会貢献、色々なところで活動していかなければなりません。けれども原点は教育、人を育むということであります。その点において生徒たちが教室で先生たちを困らせたにも関わらず、困らせながらその先生から大いなる感化をうけて人間として成熟していった、成長していった、教育というのはまさにそのようなものでなければならないという印象を持っているところです。

### 言葉の宗教

本日の聖書のテキストはヨハネによる福音書の有名な冒頭の言葉であります。キーワードになっているのは「言」でございます。私どもは人間として一般に言葉を用います。文字を使って何事かを表現しようといえます。言葉は情報伝達の手段、道具として何事かを指し示すという役割を担っています。その言葉を通して私どもは色々とコミュニケーションをはかり、人間としての生活をしています。プライベートな話で恐縮ですが、私の義母は現在病の中で失語という症状の中で過ごしています。言いたいことが言えない、そのもどかしさというのをこの4、5年の間肌身で感じてまいりました。人間にとって何事か言葉を発し、それが人の耳に届くということが、生きていく上で極めて重要な役割を果たしていると言うことができます。キリスト教は言葉の宗教であります。キリスト教にとどまらず例えばイスラームやユダヤ教のような宗教は、新約聖書旧約聖書、クルアーン、タナハ、ヘブライ語聖書のことですが、そういったものをいわば自分たちの教えの原泉として持っているのであります。私どもはその言葉を聞き、その言葉を読み、そして何事かを理解して自分の生活に役立たせよう、自分の心に染み入らせようとするのであります。キリスト教は言葉を介して成り立っている宗教であると言うことができます。

しばらく前に少し調べることがございまして、日本の民衆宗教について

勉強をいたしました。大阪、京都そして奈良のちょうどその三角地帯の真ん中ぐらい、とりわけ大阪と奈良の間に生駒山系という山々があります。生駒山の山々には日本の民俗宗教、あるいは民衆宗教といったらいいでしようか様々な宗教法人の祠や社がありまして、毎年数百万人の人が神仏混淆状態にあるお寺や神社に参拝しています。ある宗教社会学グループの先生方がその生駒山系でアンケート調査をしました。石切劔箭神社（いしきりつるぎやじんじゃ）という大きな神社がございまして、参詣にくる人々に次のようなアンケートをしました。

問「あなたはここの神社の神様をご存じですか。」

大半の人は知りませんでした。

問「神様の名前ご存知ですか。」

100%の人が知りませんでした。

問「どのようなご利益があるのですか。」

でんぼの神様、できもの腫れ物の神様として祀られています。きっとできもの腫れ物が治るのだらうということで参拝に来るのでありますが、元々はそういったものとはちょっと違うというのです。

日本人の宗教的な感覚というのは言うならば無自覚の宗教性といったらいいのでしょうか、自覚的に何事かを理解して把握してそれを生活に生かすというよりも、むしろ日常生活の中で何かそういうものに支えられている、相手の神様の名前なんてよく知らなくてもお参りすることに意味を見出す、そういった側面がございまして。もちろんキリスト教も礼拝を守り日々の生活のリズムを作るのであります。しかし日本的な文化に花咲いた宗教と比較いたしますと、キリスト教は優れて言葉の宗教、言葉を通して色々なことを受け止め、自覚的に過ごす宗教であります。キリスト教信仰とはそのようなものであると言うことが出来るように思います。

さて、本日のテキストに示されている「言」というものは、ただ単に情報を収集するための言葉、ただ単に情報を発信するための言葉を越えた何

か、文字というレベルを超えた何かを表現しているように思います。旧約聖書の冒頭には天地創造の物語が出てまいります。創世記冒頭で神は「光あれ。」と言葉を発します。そうすると光ができた。そういう表現がございます。本日の聖書の言葉では最後の14節に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と表現されています。キリスト教は、もちろん聖書における言葉は言うまでもなく、今私がこの礼拝においてこのような言葉を使って伝えておりますけれども、それら全て言葉で成り立っているものであります。キリスト教に言葉はなくてはならないもの、言葉なしにキリスト教の様々な営みは成りゆかないのでありますが、本日の聖書の言葉はただ単にそのようなやり方で伝え、聞くということだけではない、それを超える意味をここで暗示している、示している、そういうテキストなのであります。キリスト教の言葉は単なる伝達手段ではなくてそれを超える広がりを持つということができるのであります。このヨハネによる福音書に即して申し上げますと、イエス・キリストというキリスト教の中心となる存在は、「言」が肉の形をとったものであり、イエス・キリストという、歴史的に言いますと一人の人物でありますけれども、その人の人となり、立ち居振る舞いそのものが「言」であった、何事かを表現する「言」であったという言い方をすることができます。また先ほど申し上げた天地創造の物語では、もし神さまならば何事か言葉を発するとそれが出来事となる、実際のものとなる、聖書はそのような意味合いの言葉をも内に含んだテキストであると言うことができます。

### 分かち合う

新約聖書の後半にヘブライ人への手紙という一つの文書がございます。ヘブライ人への手紙13章16節には「善い行いと施しとを忘れないでください。」という表現があります。施し、今の時代に施しとは少々古い言葉であるかもしれませんが。しかしキリスト教的なものの方としてチャリティー、善きことを人に提供していくことを忘れてはいけない、そういう意味合いを持っています。元々のギリシャ語は“κοινωνία”（コ

イノーニア）という言葉であり、この言葉は一般にヘブライ人への手紙に出てきますように「施し」あるいは「慈善」というような意味合いを持っています。そしてそれ以外に「交わり」をも意味します。つまり、施しをするときには何らかの仕方で人と人とが関係しあっているのであります。そしてそれを直接に表現するような「関与する」「関わる」という意味もコイノーニアという言葉は持っています。施しを忘れないようにしなさいというのは、人との善なる関わりを忘れないようにしなさいと言い換えることができます。「敬神愛人」、隣人を愛しなさいという言葉とも繋げて理解することができる言葉であります。

私どもプロテスタントのキリスト教の出発点、プロテスタンティズムのパイオニアはドイツの宗教改革者、カトリックの修道士であったマルティン・ルターであります。ルターは16世紀の初めにカトリック教会と自分の物の見方が段々離れていくということでカトリック教会当局との色々な軋轢の中で、ある場所でしばらくの間身を隠しておりました。そして身を隠している間に聖書をドイツ語に翻訳する作業に専心したのであります。ルターのドイツ語訳聖書はそれ以降のドイツ語の模範となったと評価されている非常に重要な文書でございます。そのマルティン・ルターはヘブライ人への手紙13章16節の言葉について、これをドイツ語で“mitteilen”（ミッターレン）という言葉に翻訳をいたしました。ミッターレンという言葉は独和辞典をみますと「伝達する」、「伝える」という訳語が出てまいります。情報伝達です。ところがこのミッターレンをこの言葉の元の意味を見ながら翻訳しますと、ミッターレンの「ミット」というのは「共に」という意味でありまして、「タイレン」というのは「分かち」、ミッターレンというのは「共に分かち合う」こと、単純に「分かち合う」と言っても良いかもしれません。その意味では日本語の聖書の翻訳のように「施す」というかなり意味の限定された訳よりも、もう少し幅の広さがある訳し方をしているのであります。そこにはキリスト教的な意味で「言葉」とは何か、「言葉を伝える」とはどういうことなのか、ということに対するルターなりの理解があるように感じます。私どもは単に手段として言葉を使います。

しかし聖書では単に手段というだけではなくて、言葉そのものに命があるのです。言葉そのものに光があることを教えます。ルターが言うところの「分かち合う」ということ、それはすなわちただ単に情報を伝えるだけではなくて、自分の心の中にあるもの、自分がとても大切であると思っているもの、真実だと思える事柄が、目の前にいる人に共に分かち与えられていくということ、目の前にいる人がそれをやはり大切なものとして受け入れていくということに言葉の本来の意味をルターは見出そうとしたと思うのでございます。キリスト教のものの見方として、テクニカルに情報を伝えるだけではなく、自分の持っている心の中の大切なものが隣人に共に分かち与えられ、互いにそれを受けながら大切なものが広がっていく営みというものが目指されているのではないかと思います。それはもちろんキリスト教的なものの見方にとどまらず、実は教育全般において当てはまることとございます。

#### おわりに

名古屋学院大学も同志社も規模がどんどん大きくなっていく、それは大切なことであり、今の日本の高等教育の中で規模の拡大を目指すことは、自らの教育理念を拡げていくという意味でも大いに首肯しうることではありますが、私どもはともすれば一人一人の心と心の繋がり、心と心の分かち合いというものがあまりに多くの事柄の中で紛れてしまっていて忘れられていってしまう、あるいはどこか棚の上に上げられてしまうという傾向もあるような気がいたします。これは私の自戒でございまして、人を育むという事柄において常に心と心が触れ合いそして大切なものが互いに伝わりあうような、そういうことが目指されるべきであると思います。ヨハネによる福音書にあるように、「言」が肉となった、「言」は神と共にあったけれどもこの世にやってきた、そして「言」を通して全てのものは成り立っているのであります。言葉を通して全てのものはそこに現実として存在するようになるのである、ということを心に留めつつ日々過ごしたいと思うのでございます。

一言お祈りをいたします。

在天の主、恵みに満ちたもう父なる御神、この愛知の地に創立者フレデリック・クライン宣教師によって設立され、それ以来敬神愛人という建学の精神の下で130年に及ぼんとする歴史と伝統を築いてこられました名古屋学院大学は本日創立50年の時をお迎えになりました。この創立50周年記念礼拝を通して私どもはあなたに心を向け、あなたの御言葉に耳を傾け、あなたを賛美する時を持っております。これまでの歴史の中で多くの先人が生涯をこの教育の事業に捧げて土台を築きそれを発展させてこられました。そしてそれらの果実として2つのキャンパスを有して我が国の高等教育の責任を担う学園が与えられております。私ども人間の思いにはいつの時代であっても、良きことを目指す中にあっても何が良いことであるのか迷いの生じる時があり、また信念の揺らぐ時がございませう。またその反対に力が漲り学園の事業を大きく発展させるそのような時もございませう。どのような時においても常にあなたが、名古屋学院大学の事業とこの事業に携わる教員、職員の皆様全ての業と努力に同伴して支えておられることを感謝をもって思い起こします。どうか神さま、これからも変わることなくあなたの御手の業を通して、地上における私ども人の思いを正しい方向に導き、その事業の実現、さらなる発展のために力を与えてくださいますようお願いをいたします。一言の願いと感謝を主イエス・キリストのみ名を通して御前にお捧げいたします。アーメン

2014年10月15日(水) 名古屋学院大学創立50周年記念礼拝

# 命 の こ と ば

水谷 誠

チャペルブックレット No.19

---

2015年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部  
〒456-8612  
名古屋市熱田区熱田西町1番25号  
TEL 052-678-4096

印 刷 佐川印刷株式会社